

2024 年度 学外活動応援奨学金 報告書

イギリスとドイツにおける舞台芸術文化の比較調査

～エンタメと芸術を考える～

中央大学 文学部 人文社会学科 学びのパスポートプログラム 3 年

22E8181018I 加藤 月太朗

目次

I はじめに

II 調査概要

III 劇場散策調査

1. ドイツ・ボン&ケルン劇場散策
2. ドイツ・ベルリン劇場散策(西側／東側)
3. イギリス・ウエストエンド劇場散策

IV 演劇文化体験調査

1. シャウビューネ (ドイツ)
2. フリードリヒシュタットパラスト (ドイツ)
3. ソンドハイム・シアター (イギリス)
4. アデルフィ・シアター (イギリス)
5. ヒズ・マジェスティーズ・シアター (イギリス)

V まとめ

I. はじめに

私は、中央大学文学部の学外活動応援奨学金制度を利用し、2024年9月2日から11日にかけて、ドイツ（ベルリン）とイギリス（ロンドン）にて舞台芸術文化に関する調査を行いました。

本調査を実現するにあたり、資金面で多大なるご支援をいただいた中央大学文学部に深く感謝申し上げます。今回の調査の背景には、自分自身の視野を広げたいという強い思いがありました。これまで東京で生活し、国外に出る経験がなかった私にとって、この奨学金は初めて世界に目を向けるきっかけを作っていただきました。舞台芸術を学ぶ中で、世界で活躍する人材になりたいという目標が生まれ、そのために海外での調査が不可欠だと感じていた私にとって、この機会はとても重要なものでした。今回で得た経験と学びを、自身の卒業研究や卒業後の活動、今後の人生に活かしていきたいと考えています。心より感謝申し上げます。

II 調査概要

◇イギリスとドイツにおける舞台芸術文化の比較調査◇

【調査活動期間】

2024年9月2日～11日

(ドイツ滞在：9月3日～6日、イギリス滞在：9月7日～9日)

【対象地域】

- ・ドイツ(ボン、ケルン、ベルリン)
- ・イギリス(ロンドン)

【目的】

調査を行う目的は以下の二つである。

1. 両国の舞台芸術文化の特徴を理解すること。

書籍による間接的な知識だけでなく、実際に現地を訪れ、体験し、感じることで得られる直接的・体感的な学びや体験を得たい。

2. 両国の演劇が持つ「エンタメ性」や「芸術性」の違いを把握する。

イギリスは「エンタメ性」、ドイツは「芸術性」の高い演劇が盛んと言われており、両国の演劇の比較を通して、それらを理解する。

【活動行程】

9月2日(月)：《日本国出国日》

16:35 羽田空港 → (乗継：ノイバイ国際空港) → ドイツ(フランクフルトへ)

9月3日(火)：《ドイツ1日目》

6:00 フランクフルト国際空港到着 → ボンへ移動(約2時間)

[PM] ボン劇場散策

9月4日(水)：《ドイツ2日目》

ボン&ケルン劇場散策

9月5日(木)：《ドイツ3日目》

[AM] 8:14～13:32 ケルン中央駅→ベルリン中央駅

[PM] 西ベルリン劇場散策

20:00～22:00 「Im Herzen der Gewalt」鑑賞

9/6(金) 《ドイツ4日目》

東ベルリン劇場散策

19:30～ フリードリヒシュタットパラスト 「Falling In Love」鑑賞

9/7(土) 《イギリス1日目》

[AM] 9:35～10:30 ベルリン・ブランデンブルク空港 → ロンドン・ルートン空港

[PM] ロンドン(ウエストエンド)劇場散策 1 回目

19:30～ 「Les Misérables」鑑賞

9 / 8 (日) 《イギリス 2 日目》

[AM] ヴィクトリア・&・アルバート博物館訪問

⇒※演劇 corner は修繕作業中で見る事が出来なかった。

[PM] 15:00～17:40 「Back To The Future」鑑賞

9 / 9 (月) 《イギリス 3 日目》

ロンドン(ウエストエンド)劇場散策 2 回目

19:30～ 「The phantom Of opera」鑑賞

9 / 10 (火) 《イギリス 4 日目・出国日》

12:20 ヒースロー空港出発 → (乗継: 香港国際空港) → 日本へ

9 / 11 (水) 《日本帰国日》

→14:30 成田国際空港到着

Ⅲ 劇場散策

1. ボン・ケルン散策(9 月 3 日～4 日)

○ボン劇場オペラハウス

— Theater Bonn Opera House

[位置] ライン川の畔に建っており、ケネディ橋の近くにある。

[外観] 近代的な建築様式。まるで会談のように複数の層が積み重なっているのが特徴。

劇場の前には一面に芝生が広がり、オブジェが一つ設置されている。

[内観] × (閉館中)

[客層] × (閉館中)



[印象]劇場に着いてすぐ、緑色の芝生が目に入る。川沿いに位置しているということもあり、とても穏やかな印象である。劇場の建物はかなり近代的なつくりになっている。西洋のオペラ座は歴史ある重厚な建物が多い印象があったため、ここの近代的な建物には少し違和感を覚えた。



劇場の周りには、一般的な住宅街が並んでいたが、一つ道路挟んだすぐ近くに、“Theater Garagen”と呼ばれる駐車場と、“Opera restaurant bar- café”



というレストランを見つけた。名前から見ても、このオペラハウスに訪れる来場客を意識していることだと思われる。

○ユングス・シアター・ボン —Junges Theater Bonn

… ユングス劇場は、50 年以上にわたってドイツの子供や若者に人気の劇場。



[位置]ボンのベエル地区のヘルマン通りに位置しており、隣の住宅と密接にくっついている。劇場の隣には Bar も併設されていた。道路を挟んで向かい側には、カトリック教会と病院、そして駐車場が設置されている。

[外観]外観のデザインは、とてもユニークでかわいらしい印象。入り口の大きな窓には、折り紙の花やおもちゃが飾られている。

[内観] △ →かわいらしい絵が多く飾ってあるのが外からでも確認できた。

[客層] × →先行調査によると、子どもや若者向けの作品を作っているという。



[印象] 建物のかわいらしいデザインなど、外観からだけでも、子供や若者向けの劇場ということが大きくうなずける。入り口上部に設置された“JUNGES THEATER BONN”という黄色の看板に注目すると、昔ながらの小さな映画館のような雰囲気を感じられる。個人的には、地元の児童館と同じような、比較的親しみやすい場所の印象を強く受けた。劇場の部類としては、小劇場のような位置に分類され、子供たちが集まる場所として、地域になじんでいるのかもしれない。



○ミュージカルドーム・ケルン ーMusical Dome Köln

ミュージカルドームケルンは、もともとミュージカルの一時的な公演会場として建てられた劇場であり、現在は“ミュージカル・ムーランルージュ”面上演されている。ケルン大聖堂のすぐ近くに位置し、約 1,560 人のゲストを収容できるスペースを提供している。



[位置] ケルン中央駅近く、大聖堂の反対側にある。旧市街の中心部にあるライン川の遊歩道に直接面しており、歩く人の目を引く。入り口も川側にある。

[外観] 比較的丸いドーム型の劇場。ガラスと鉄骨の構造が特徴的な建物で、わかりやすく仮設劇場である。

[内観] × →閉館時間に訪問

[客層] ×



[印象]実際にライン川の遊歩道から見ると、そのユニークな建築物に目を見張る。自分の他にも、観光客と思われる男女の二人組がドームの写真を撮っていた。一種の観光スポットにもなっているのかもしれない。

ドームは、180度どの角度にも、上演している“ムーランルージュ”のポスターが張られており、劇場のユニークさ、その劇場の位置する場所も相まって宣伝の効果はとて高い。より多くの観客を得ようとする姿勢が見て取れる。やはり、ミュージカルという演劇ジャンルは商業演劇にふくまれるのだろうか。



2. ベルリン劇場散策(9月4日～5日)

ベルリンには多くの劇場が多く運営されているため、ベルリンを西と東に分け、二日間にわたり、劇場散策を行った。

【西側】

○テアター・デス・ヴェステンス —Theater des Westens

... ベルリンの動物園駅からすぐ脇にあるミュージカル系の大劇場。

[位置]ベルリン西部のシャルロッテンブルク地区にあり、クアフルステンダム通りの近くという一等地に位置している。

[外観]とても壮麗で、ヨーロッパのクラシカルな劇場の建築様式を感じさせる。大きな塔や彫刻が特徴的で、それらの存在感が強い。

[内観]× →閉館時間中

[客層]× →閉館時間中



[印象]デパートなどが位置する大通りからすぐ近くに位置しておりこの劇場の存在感に圧倒された。豪華で少し格式の高そうな劇場である。現在、「KUDAMM59」というミュージカルが上演されており、その宣伝の旗やポスターが張られていた。



○ベルリン・コーミッシェ・オパー —Komische Oper Berlin

[位置]ベルリンのミッテ地区に位置し、ブランデンブルク門に近い。観光エリアに隣接しているため、アクセスは比較的良好な場所にある。

[外観]劇場の外観は、比較的控えめでシンプル。モダンな印象を受ける。劇場の真ん前には、ボン劇場のオペラハウスト同様に大きな広場が広がる。

[内観]× →閉館中

[客層]× →閉館中

[印象]劇場のつくりや、広場に設置された真っ赤な看板のデザインからもモダンな雰囲気の感じる劇場である。伝統的な劇場の豪華さというよりも、機能性を重視した印象を与える。



○シャウビューネ —Schaubune am Lehnier Platz

※この劇場では、観劇も行ったため、【IV 演劇文化体験】にて詳細に記載する。

【東側】

○ドイツ座

－Deutsches Theater

[位置] ベルリンのミッテ区の住宅街の中に位置。周囲は静かで落ち着いた環境。

[外観] 外観は 19 世紀の建築様式を色濃く残しており、歴史を感じさせる重厚な佇まい。正面にはがあり、劇場らしい威厳を感じさせる。

[内観] × → 閉館中

[客層] × → 閉館中

[印象] 住宅街を歩いていると、一か所だけ奥まった空間があり、入ってみると、そこに劇場があった。その空間、広場があることで、この劇場は住宅街の中でも独立しているように感じられる。住宅街という場所にあるということは、地域の文化的拠点としての役割を担っているのかもしれない。



○ベルリナー・アンサンブル

－Berliner Ensemble

[位置] シュプレー川近く、観光エリアにも近い場所に位置する。周辺には多くのカフェやレストランが並び、観劇の後に食事を楽しむことができる環境が整っている。

[外観] 伝統的な建築が特徴で、劇場の歴史と威厳を感じさせる伝統的な建築が特徴的。建物の頂上に、劇場の名前が書かれた丸い看板が回っており、観光客にもわかりやすい。目の前には公演があり、ブレイヒトと思われる人物の像があった。

[内観] × → 閉館中

[客層] × → 閉館中



[印象]シャウビューネとよく対になる劇場だが、建築様式もかなり異なる。こちらの方は伝統らしさを強く感じさせる作りだった。私が訪れた際には、劇場の前の公園でテレビか何かの撮影が行われていた。有名な劇場だということを強く実感した。

○アドミラルパラスト

－Admirals Palast

[位置]ベルリンの中心部、フリードリッヒ通りにあり、ショッピングエリアにも近い。交通の便が非常によく、観光客や地元の人々にもアクセスしやすい立地。

[外観]外観はクラシックな雰囲気とモダンな要素が融合したデザインで、上品な印象を与える。歴史的建物でありながら、現代の感覚も取り入れているのが特徴。

[内観]×

[客層]×



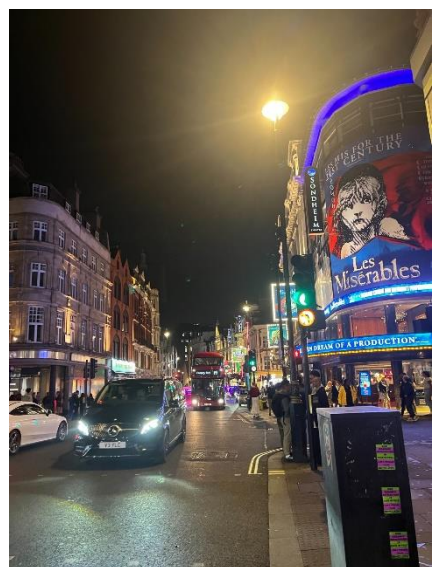
○フリードリヒシュタットパラスト－Fridrich stad palast

※この劇場では、観劇も行ったため、【IV 演劇文化体験】にて詳細に記載する。

3. ロンドン劇場散策

ロンドンという街は、観光都市としての個性が際立っている。街中には伝統的でありながら観光の象徴ともなっている、二階建てバスや真っ赤な電話ボックスが至るところに見受けられる。

人々の多さや建物の密集具合を見ると、東京と少し似た雰囲気も感じられる。しかし、ロンドンならではの風情と独特の文化が町全体に息づいており、観光都市としての魅力が際立っている。そんなロンドンの中で、演劇も「観光」としての重要な役割を果たしている。ロンドンで観劇ができる場所は、ウエストエンドと呼ばれる地区に集中しており、このエリアはまさに観劇の聖地といえる。





ウエストエンドの劇場は、どこも目を引く鮮やかな看板や照明で観客を迎え、街全体が一つのエンターテインメント空間として機能している。各劇場の看板は非常に派手で、劇場の伝統的な建築様式をあえて無視した、演目に沿った装飾や加工が施されていることも多い。さらに、ロンドンの劇場ではロングラン上演が主流であることも観劇文化の一つの特徴だ。長期的に一つの演目を上演し続けることで、劇場と演目が強く結びついている。例えば、ソンドハイム劇場と言えば「レ・ミゼラブル」というように、その劇場と言えばこの演目、というイメージが自然に形成されている。ロンドンの街を歩いているだけで、どの劇場で何が上演されているかが明確に伝わり、観光客にとっても大きな魅力となっている。このように、ロンドンにおける演劇は単なる芸術表現にとどまらず、観光産業の一環として街の活気を支える存在となっている。



IV 演劇文化体験

1. シャウビューネ・暴力の歴史

【劇場】

シャウビューネ
(Schaubühne am Lehniner Platz)

【観劇した演目】

『Im Herzen der Gewalt(暴力の歴史)』
... 原作はフランス人作家のエドゥアール・ルイの
自伝的小説。セクシュアル・マイノリティとしての
アイデンティティを軸に社会に容認され、黙殺さ
れ、そして再生産される暴力に目を向ける作品。東
京でも 2019 年に上演されたことがある。

【劇場調査】

[位置] ベルリンのヴィルマースドルフ地区、
Kurfürstendamm 大通りに位置する。

[外観] 劇場全体がガラス張りで、非常に開放的な雰囲気が漂う。劇場の周辺には広めの
スペースがとられており、劇場入り口付近にはテラスが設置されている。

[内観] 劇場内部は白を基調としたデザインで、全
体的にモダンな印象を与える。中に入ると、ガラス
張りによってもたらされる劇場の開放的な雰囲気を
強く感じる。上演が行われるホールの内部の壁面は
真っ黒で、一見、映画館のようである。

[客層]

○年齢層：30～50 代の男性が多く見られた。

○服装：観客の服装はカジュアルで、比較的ラフな格好で来ている人が多かった。劇場の
スタッフは若い世代が中心で、T シャツ姿の人も多かった。

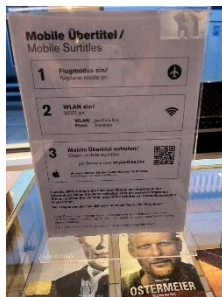
○ノリ・雰囲気：劇場内は落ち着いた雰囲気でありながら、観客同士の距離が近いことで
リラックスした空間を演出していた。観劇をしながら飲み物を飲む人もいた。



【演劇文化体験】

劇場に足を踏み入れた瞬間から、解放感とモダンな空気に包まれた印象だった。開演まで時間があったため、テラスでカプチーノを飲みながら、開場を待つ人々を観察した。人々の会話する様子を見ているとここがカフェのような場所に見えてくる。

地元の人々にとって、劇場は人々の集まる場所であり、意見交換のような場所であるように感じた。



だがその一方で、この劇場は世界的に有名ということもあってか、まさかの日本語翻訳サービスを提供していた。(日本で上演したことのある演目ということも大きな要因かもしれない)これには驚いた。自分のスマホを劇場のWi-Fiに接続しておくと、上演中、セリフの進行に合わせて字幕が表示される。これは画期的なサービスだと思った。

上演されるホールの内部に入ると、舞台を除いて壁一面が真っ黒であった。舞台には、ベンチが右奥に設置されており、演者である男性がすでに座っていた。何やら考え事をしているような面持ちで、もう舞台は始まっているということを実感した。個人的に面白い演出である。舞台の右側には楽器が設置されている。写真の通り、全体的にとってもシンプルな作りである。



もう一つ面白いと思ったのが、演奏する人をがっつり見せているということである。舞台において、演奏者は隠されることが多い。また演奏者を見せているという点も含め、舞台を際立たせる枠を作ったり、あるいは舞台を客席よりも一段上げるというような舞台を独立させようとする意図が全く見られない。横部分に壁、仕切りがないことで、舞台と客席が隔たれているという感じがしなかった。舞台ならではの良さである「同じ空間を共有する」という点を強く感じた。客席に演者が出てくるという演出はなかったが、それでも距離の近さを感じた。

2. フリードリヒ・シュタット・パラスト

【劇場】

フリードリヒシュタットパラスト
-Fridrich stad palast

... ベルリンにある豪華なショーパレスで、世界最大の舞台面積を誇る。レビューショーやミュージカルなど、多彩なエンターテインメントが上演されている。

【劇場調査】

[位置]ベルリンの中心地、ミッテ地区に位置し、観光名所や主要交通機関へのアクセスも良い。



[外観]モダンでガラスを多用した外観は、夜間にライトアップされて非常に目を引く。特に、大きなエントランスが観客を出迎える光景は圧巻の見栄え。

[内観]内装はゴージャスで、ステージには実際にプールが設置されるなど、豪華な演出が特徴的。広い座席エリアは、見やすく快適に設計されている。



【演劇文化体験】

演目：FALLING IN LOVE

シャウビューネ劇場に比べると、すごく大きい劇場だった。各階にバーが設置されており、上演前と幕間の休憩時間はそこでお酒を飲んでいる人が多かった。

ショーの感想としては、とても面白かった。意外性や驚きの観点から見れば、この舞台が一番印象に残っている。驚いたのは、その演出である。ワイヤーにつるされた俳優が、舞台の上を優雅に舞ったり、客席の後ろからブランコのようなものに乗ってでてきたり、舞台にプールや噴水ができるなど、豪華な演出がとても多かった。サークルで実際に舞台制作を行っている目線では、どれだけ費用をかけているのか非常に気になる。このショーに翻訳サービスはなかったためドイツ語は分からなかったが、ストーリーは比較的優しいものだったので、なんとなく理解することはできた。また前述の豪華な演出もあり、ビジュアルだけでも十分に楽しめる内容だった。海外からの観光客も狙っているのだろう。



3. ソンドハイムシアター

【劇場調査】

ソンドハイム劇場 —Sondheim Theatre

... ソンドハイム劇場は、ロンドンのウエストエンドに位置し、現在はミュージカル『レ・ミゼラブル』のロングラン公演で有名。



【劇場調査】

[位置] ロンドン中心部にあり、主要駅からアクセスが良い。通路の角に位置しており、目立ちやすく、見つけやすい。

[外観] 外観は『レ・ミゼラブル』一色に包まれていて、夜には鮮やかにライトアップされる。歴史ある建物の雰囲気を残しつつ、現代的な装飾が施されている。

[内観] 内部はクラシックな内装で、赤いじゅうたんが敷かれた落ち着いた雰囲気。シャンデリアや古風な照明が重厚な劇の世界観をさらに引き立てている。

[客層] 幅広い年齢層が訪れるが、観光客が多く、カジュアルな服装の人も多い。リラックスした雰囲気で観劇が楽しめる。



【演劇文化体験】

演目：Les Misérables

劇場に入る前から『レ・ミゼラブル』の世界が始まっているような感覚があった。劇場の外には大きく「レ・ミゼラブル」のポスターが掲げられていて、観光名所としての意識が感じられる。夜になると華やかにライトアップされ、通行人の目を引く。

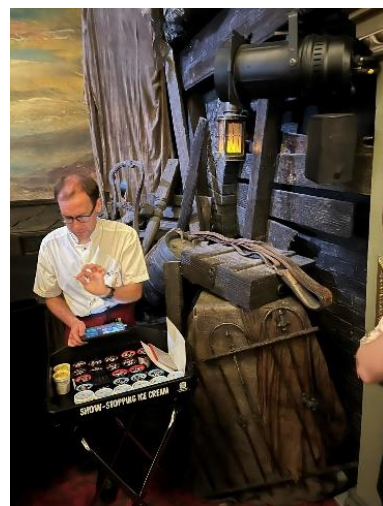


入り口ではチケットの確認やかばんの中身チェックが行われ、飲み物の持ち込みも確認された。中に入ると、赤いじゅうたんが敷き詰められた床が目を引き、天井が思ったより低いことに驚いた。入り口はガラス張りで開放的な印象。

劇場内には各階にバーがあり、スタッフはプログラムを持っていて、一人一冊売るように決まっているかもしれないと感じた。内装は外観と比べてかなり昔ながらの印象で、ろうそく風のライトが使われていた。



観客の服装はカジュアルで、映画を見に来ているような雰囲気だった。開演前に「エンジョイ、レミゼラブル！」というアナウンスが流れ、客席から盛り上がるの聲が上がった。この時点で日本とは違う雰囲気を感じた。幕間にはアイスが販売されていて、ガイドブックによるとこれは伝統的なものだという。



4. アデルフィシアタ

【劇場調査】

アデルフィ劇場 (イギリス)

－Adelphi Theatre

... アデルフィ劇場は、ウエストエンドにある歴史的な劇場で、現在では『バック・トゥ・ザ・フューチャー』を上演しており、話題になっている。

【劇場調査】

[位置]アデルフィ劇場はロンドンのストランドにあり、トラファルガー広場やコベントガーデンからも徒歩圏内にある。観光客にとってもアクセスが非常に良い。

[外観]劇場の外観は、歴史的な雰囲気を残しながらも、現代的に改修されていてスタイリッシュ。特に『バック・トゥ・ザ・フューチャー』の大きな看板が目を引く。

[内観]内部は非常にモダンで、最新の音響や照明設備が整っている。座席は広く、ゆったりとしており、長時間の観劇でも快適に過ごせるよう工夫されている

[客層]家族連れやカップルが多く、観光客も目立つ。特に映画原作の『バック・トゥ・ザ・フューチャー』という作品の人気もあり、幅広い年齢層が訪れている。



【演劇文化体験】

演目：Back To The Futur

ソンドハイム劇場と同様に入場時にはチケットの確認と荷物のチェックが行われた。外観も内観も比較的、モダンなつくりで、未来をテーマにしたこの作品の雰囲気とも合う。この劇場は、演目のテーマやジャンルに合わせて選ばれたのだろうか。この劇場も各階にバーが設備されていた。海外の劇場ではこれが当たり前のようである。バーに関して非常に面白いと思ったのは、バーのスタッフが『バック・トゥ・ザ・フューチャー』に登場する科学者と同じ白衣を着ていたところである。粋な計らいだなと思った。上演以外でも、演目の世界観を維持しようとする仕掛けは、観客としてとても楽しいし、既存の映画ファンからすれば非常に嬉しい。他にも映画で出てくる有名な時計台の時計が設置されており、写真スポットになっていた。舞台や客席以外で、ユニークで新しい試みが多く行われていた。演目を見たいと思わせるだけでなく、この劇場に行きたいと思わせる意図が見て取れた。



『バック・トゥ・ザ・フューチャー』の演出に関しては、映像技術が大いに活用されており、映画と舞台の境界が曖昧になるほどの迫力だった。映画をすでに知っている私からすると、作品のテンポ感が少し遅いと感じる部分は正直あった。だが、キャラクターの心の葛藤や叫びが吐露されるミュージカルのナンバーシーンは、映画よりも詳細に深掘されており、かつ客の心にとっても響く。また、ここぞという見せ場のシーンは、作品の世界観を観客にも共有するという舞台ならではの良さを強く生かしていた。ラストのタイムマシンの車が客席まで飛び出してくる演出は衝撃的で、観客も大きな歓声を上げた。今回の観劇では、映画と演劇の二つで展開されている作品を比較することで、各表現方法にどのような違いが出るのか、はたまたそれぞれの持つ魅力とは何か、を考える大きなきっかけを得ることが出来た。

また、今回の幕間では、ソンドハイム劇場でも販売していたアイスクリームを実際買って食べることにした。ロンドンのガイドブックでは、幕間にアイスを食べるのが伝統だと記載されていたが、実際、アイスを食べている人は全体の半分以上いた。隣の席の方が、ロンドン出身の方だったため、アイスを食べる伝統について伺ったところ、「伝統というほどのことではないと思うが、スタッフがいつも持ってくるから購入してしまう」とおっしゃっていた。アイスの会社と劇場は何か提携を結んでいるのだろうか。どちらにせよ、日本と比べてかなりリラックスして観劇が行える舞台芸術文化がロンドンに根付いていることは確かである。



5. ヒズ・マジェスティーズ・シアター

【劇場】

ヒズ・マジェスティーズ・シアター
—His Majesty's Theatre

... ハーマジェスティーズ劇場は、ロンドンのウエストエンドにあり、『オペラ座の怪人』がロングラン上演されている劇場として有名。

【劇場調査】

[位置] ロンドンのハイマーケットに位置し、ウエストエンドの劇場街の中心にある。アクセスが非常に良く、観光客にも人気のあるロケーション。

[外観] ビクトリア朝建築のエレガントな外観が特徴的で、伝統的な雰囲気醸し出している。特に夜間のライトアップが美しく、劇場街の一部として目を引く。

[内観] 内部は非常に豪華で、シャンデリアが煌めくホールと、重厚な赤いカーテンが特徴的。全体的にクラシカルなデザインが施されていて、作品の重厚な世界観を引き立てている。

[客層] 40代以上の観客が多く、特にカップルや観光客が目立つ。フォーマルな服装の人が多く、上品な雰囲気の中で観劇が楽しめる。



【演劇文化体験】

演目：The Phantom of the Opera

ヒズ・マジスティーズ劇場では、『オペラ座の怪人』が長く上演されており、劇場自体がその象徴とも言える。観客は全体的に観光客が多く見られた。演目の知名度の画所以であろう。他に観劇したに作品とは違い、開演前から舞台の幕が上がっており、設置された舞台装置や小道具を見ることが出来る。始まる前から舞台がオープンになっている状態は、観客の好奇心や興奮、わくわく感を強めさせる。写真を撮っている方も多く、上演を今か今かと待ちわびる人が多い印象を受けた。私もその一人だった。



しかし、残念ながら、今回の観劇体験は、正直充実したものとは言えなかった。日本で観劇する際、基本的には背中を席から話すことはマナー違反だということになっている。そのルールは世界共通のようで、上演前もスタッフが客席に向かってそのようなことを説明していた。だが観光客と思われる私の前の方は、前のめりになって観劇していたため、その方の頭部によって舞台が半分以上隠れてしまっていた。また少し離れた後方から、英語ではない言語のしゃべり声も聞こえてきた。そのため、正直上演中、自身のいらだちにより集中してすることが出来なかった。

だが、新たに得られた学びもある。演劇は、他の観客とも空間を共有するため、隣の人の咳払い、息をのむ音、涙を流す声など、も観劇という体験をする上で重要な要素として考えられる。今回、私自身がいらだちを覚えてしまったのも、他の観客と空間を共有しているが故のことである。その現象は、今回ネガティブな感情を覚えてしまったが、逆に言えばポジティブな感情を観客に与えることも可能だということである。



そう考えると、演劇において『笑い』の要素は非常に重要な要素と言える。誰かの笑い声を聞いて、笑顔を見て、こっちも笑ってしまいますことや笑いが伝播することはよくある。これはまさに演劇ならではの、演劇の大きな強みの一つではないかと考えられる。

しかし、観劇を楽しむという視点かと言えば、心残りはまだ会うため、再びロンドンを訪れた際には再挑戦してみようと思う。

V 調査のまとめ(個人的な見解)

今回の比較調査において、国によって演劇の上演スタイルに違いがあり、劇場や街並みなど様々な要素からその違いを感じ取ることができた。

劇場の位置している場所

- ドイツでは、劇場が一か所に集中しているわけではなく、街中に点在していることが多い。また、劇場の周りには広いスペースが確保されており、公園のような空間が多く見られる。これは仮説だけど、ドイツの演劇が社会性の強い作品が多いため、観客が舞台を観終わった後に考える時間が必要で、そのために近くの公園や広い芝生が落ち着く場所として機能しているのではないかと感じた。
- イギリスでは、劇場は混雑した街の中心に位置しており、「観光」としての役割も兼ねていると感じた。また、劇場自体が「楽しむ場」としての役割を果たしている印象を受けた。

劇場の外観

- ドイツの劇場はシンプルで重厚な建築が多く、観光地として派手な装飾はあまり見られない。
- イギリスの劇場は、看板や照明を使って派手に演出しており、人の目を引くことを意識したデザインになっている。

劇場の内観

- ドイツの劇場は比較的シンプルで実用的な内装が多く、厳粛な雰囲気を感じさせる。
- イギリスの劇場は豪華で華やかな内装が多く、エンターテインメント性を重視した作りになっている。演目によって、内装を大きく変えるなどの工夫も見られた。

客層

- ドイツでは、年齢層が幅広く、劇場や演目によって大きく異なる。中には、正装して観劇に訪れる観客が多い劇場も存在する。
- イギリスでは、カジュアルな服装で訪れる観客が多く、観劇自体がもっと気軽に楽しめるものとして浸透している印象を受けた。特に、ソンドハイム劇場やアデルフィ劇場ではほとんどの観客がカジュアルな服装だった。

客層の雰囲気

イギリスのミュージカルでは、観客の歓声や反応が大きく、演劇自体をエンターテインメントとして楽しむ姿勢が感じられた。一方、ドイツでは、観劇がもう少し静かで厳かな場とされている印象を受けた。

総括

今回の調査を通じて、演劇の多様性について強く感じた。商業演劇と芸術演劇はしばしば対立するカテゴリーとして扱われるが、実際に現地で演劇を体験してみると、その境界は非常に曖昧であると気づいた。国や地域によってどちらかが強調される傾向はあるものの、演劇という表現はそれを超えて広がっており、単純に地理的な枠組みで分けられるものではない。

商業演劇と芸術演劇の違いは、それぞれが果たす「役割」の違いに過ぎない。そして、その役割が異なるからこそ、演劇には無限の可能性が秘められていると実感した。ドイツでは、演劇がナチス政権に利用された過去があるように、演劇が多様性を持つということは、その多様性が時に危険を孕むこともある。しかし、演劇という表現形式は、時代の変化に適応しながら、その危険性を乗り越え、進化し続けてきたのではないだろうか。今回の実践的な、体験的な調査を通して、自分のなかの『舞台芸術』・『演劇』と呼ばれるものの考え方、捉え方が大きく変わった。非常に有意義な時間を過ごすことが出来た。

また、今回の体験を通して、映画という視点を通じて演劇を観察・調査することにも興味が湧いた。それぞれの表現方法の特徴も踏まえ、この新たな視点についても今後深めていきたい。これからの演劇の未来に関する新たな気づきを得られるかもしれない。